

子どもの生活に添いながら、途切れることのない支援を続けるために、関わるボランティアを常に確保していく必要があります。しかし、大学生ボランティアも、大学の講義が通常に戻り、実習や就職活動もある中で、次第に活動の時間の確保が難しくなったり、進級や卒業に伴う代替わりがうまくいかないと、活動の引き継ぎがうまくなされないなどの課題を持っていました。そのことに対して次のような取組みで対処してきました。

①近隣の大学からの大学生ボランティアの募集

最初に連携・協力していた福島大学からの協力だけでは平日の支援に対応しきれないことから、桜の聖母短期大学、福島学院大学など近隣の他の大学にも協力を呼びかけ、ボランティアの募集をはかりました。いずれの大学も、ボランティア担当教員より、好意的なご協力をいただき、教育や保育の指導をされている先生は、研究室の学生を伴って、仮設住宅での子ども向けの企画を受け持ってもらうなどの今協力もいただきました。

②社会人ボランティアの活用

大学生ボランティア以外に、社会人のボランティアも子どもたちに携わってくれています。学生時代の被災地ボランティアの経験を活かして就職後もボランティアに関わりたいという若者もいれば、東京都からアパートを借りて1年間福島に滞在してくれた退職教員の方、受験前の1ヵ月間集中して指導にあたってくれた千葉県の先生など、地域を超えた支え手の協力をいただいています。

3. 学習支援のヒント - 学習支援人材確保の持続可能性を高める(2)

特定非営利活動法人ビーズふくしま

③ 県外大学生グループの協力

夏休みや冬休みなどの長期休みの期間に県外大学生グループの受入れを行っています。静岡・名古屋方面の大学生のボランティアグループ6名～10名を1週間受入れ、午前中は夏休みの宿題、午後はプールや体を動かして思いっきり遊ぶプログラム。他にも遠足をしたり、住民の皆さんと一緒にキャンドルナイトを行うなど、仮設住宅の子ども達とどっぴり一緒に関わってくれます。



3年間、毎年関わってくれることで、子ども達にとっても楽しみになっています。また続けて来てくれる大学生ボランティアにとってもかけがえのない経験になっているようです。

④ ボランティアハウスの取組み

震災から3年。仮設住宅で避難生活を送っている子どもたちの置かれている環境は基本的に変わらないにも関わらず、外部からの支援は年々細っていきます。

ボランティアに関しても減少が著しく感じられるところがありました。

しかしながら、条件が許せば、少しでも被災地に滞在し、ボランティアをしたいというニーズも少しずつですが寄せられていました。そこで問題となるのが滞在のコストです。

県外のボランティアの場合、ホテル代やアパート代を負担してまでのボランティアはハードルが高いものになります。

そこで私達は、空き仮設住宅をボランティアの滞在用に何とか借りることができないかと考えました。町や県と1年越しの交渉とお願いの結果、2014年8月より空き仮設住宅をボランティアの滞在用にお借りできることになりました。福島県内ではこれまでになかった画期的な取組です。